

翻訳という世界

4

ない。

イラスト・青木 憲司



船越
隆子

卷一百一十五

分からぬ。それでも、自分なりに感じ取つたその作品の雰囲気をなるべく出せるよう心がけてゐる。

心配といえば、もっと深刻な「心配」にぶつかったこともある。人物像云々を言う以前に、その人の話を内容が理解できなかつたの

独特の訛りに困惑

町のおかみさんとでも違うだろう。山の手の奥さんと、下で、その人だけではなく、作品全体の雰囲気まで変わつてくるだろう。

そして、同じ人でも、場所や相手が違えば、言葉遣いも変わる。会社の上司に報告をすると、合コンで女子の子としゃべる時では、もしかしたら別人くらいに違うかもしれない。

日本人であり、英語圏で育ったわけでもない私が翻訳をする際、作者の意図を理解することになる。自分の描く人物や作品像は、原作者が本音のニュアンスをどこまでこみとれているかは、まるで違うか、と心配は尽き

英語版「あるでないで」

方言の雰囲気 どう表現？

なんならルートにいるかによつても変わる。英語をしゃべる男を、大阪お医者さんには特有の言弁のおっちゃんに例える。葉遣いがあるだろうし、八百屋のご主人にもあるだろう。山の手の奥さんと、下町のおかみさんとでも違う。品全體の雰囲気まで変わつたところは強い訳があるので、たとえ

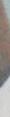
言語の中でも、地域によって決めてしまう場合もあるの
で（つまり方言）、職業にだから、翻訳者の責任は重
よって、また生活環境やど
んなグループにいるかによ
るとえは強い記号のある
大だ。

それ個性がある。
言語が違えば、その特徴
は全然違ってくるが、同じ
で、その人のとなりまで
言語が違う、なぜこ

翻訳家

船越 隆子

るよう心がけている。
小説の地の文体、映像でのナレーションの口調は、作品全体の性格を決定づけ

 分からない。それでも、自分なりに感じ取ったその作品の雰囲気をなるべく出せるよう心がけている。

番言とし二世界

羽尺六、九世界

